

Title	リカードウの一書簡(慶應義塾図書館所蔵)をめぐって
Sub Title	An unpublished letter of D. Ricardo
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.85, No.1 (1992. 4) ,p.15- 30
JaLC DOI	10.14991/001.19920401-0015
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920401-0015">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920401-0015</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## リカードウの一書簡（慶應義塾図書館所蔵） をめぐって\*

飯田 裕 康

### はじめに

リカードウ (David Ricardo 1772—1823) の経済学者としての達成にとって、かれが多くのひとびとと交わした書簡が重要な意味を持っていることはだれしも否定しがたい。とくにジェームズ・ミルやマルサスとの間に交わされた書簡は、リカードウの主著『経済学および課税の原理』(*On the Principles of Political Economy and Taxation*, 1817) の形成とその理論的な内容の理解に欠くことのできないものであることも、いまさら敢て指摘するまでもない。スラッフアの編集になる *Works and Correspondence of David Ricardo* (Cambridge University Press 1952—60) は vol. VI から IX までの4巻を書簡にあてており、その物理的な分量だけからしても、Ricardo の知的な生涯において書簡がいかに重要な役割を果たしたかが理解できる。

スラッフア版全集の刊行終了ののち、1978年に慶應義塾図書館は Ricardo の未発表の書簡一通を購入した。この書簡は、レディー・メアリー・シェパド (Lady Mary Shepherd) に宛てられたものであるが、差し出し日が「10月6日」とあるだけであって、何年のそれであるかが不明である。スラッフア版全集の補巻であるこの全集全10巻のための索引には、レディー・メアリー・シェパドの名前は項目として記載されており、リカードウ自身が彼女に言及した書簡が一通収められている。

---

\* 小稿の作成に当たって、筆者はなによりも Ricardo Papers の閲読にかんして Cambridge 大学 University Library の Manuscript Room から与えられた便宜にたいして深く感謝する。また、筆者の疑問に長時間にわたって懇切に答えていただいた Cambridge 大学天文学研究所 (Institute of Astronomy) のデューハースト博士、同研究所ならびに Downing College の Fellow で電波天文学専攻のダフ＝スミス博士、University Library の小山騰氏にそれぞれ感謝の意を表したい。本書簡の Transcription を詳細に検討され、ご教示をいただいた慶應義塾大学経済学部須藤壬章氏のご援助なくしては小稿は作成しえなかったであろう。小稿作成の機会は、筆者が1991年10月より3箇月間慶應義塾大学より Cambridge 大学 Downing College に派遣されたことによって与えられた。とくに、Downing College の Master, Prof. P. Mathias には諸般にわたって便宜を図っていただいたばかりか、本書簡とかかわるリカードウの個人史の背景にかんして貴重なご教示をいただいた。また、文献検索にかんして坂本達哉氏のお世話になった。加藤弘和氏には原稿の一部を読んでいただいた。併せて感謝する次第である。にもかかわらず、小稿が免れていない誤りはすべて筆者の責めに帰せられるべきことは言うまでもない。

しかし、ここで検討の対象とする書簡の存在を暗示するような記述はなにもない。小稿はこの書簡が何年にかかれたものであるかを推定しようとする試みであり、この書簡の書誌的検討の材料を提供しようとするものである。

[補注] この小論は、直接的には Ricardo の書簡にかんする書誌的なデータを提供することを意図しているが、たんにその点にかんしてのみならず、そもそも Ricardo と経済学 (Political Economy) とのかかわりにかんしても有益な情報を提供しうるものと考えている。このような観点から注意すべきものとして S. G. Checkland のつぎのような指摘をあげておきたい。

「しかし今日この新版『原理』にウォータールー後の時代のイギリスにかんする社会的哲学的諸前提に突き動かされて接近しようとする人があるであろうか。」(S. G. Checkland, *David Ricardo Economic History Review* Vol. 114 (3) Wood, J (1985) p. 70)

この反語的な表現のなかにある「ウォータールー後のイギリスの社会的哲学的諸前提」にたってリカードウの『経済学原理』、いなリカードウ経済学を見直す必要があるという論点を、筆者も共有するものである。これは、スラッファによるリカードウ全集編集の功罪にもかかわる論点であろうと考えている。これについては、さらに S. G. Checkland, *The propagation of Ricardian economics in England, Economica* Feb. 1949 をも参照。

## 1. 本書簡テキスト

### The Lady Mary Shepherd

My dear Lady Mary

I thank you very much for the extract from the French author which you have been so kind as to send me. I am too little of an astronomer to solve your difficulty—to shew the connection between the precession of the Equinoxes, & the declination of the Ecliptic. My incredulity will not let me believe that this philosopher has any good basis for his calculations, and consequently I doubt whether he has advanced our knowledge, in the least degree, respecting the age of the world.

I have undertaken a task which engages much of my time & attention, it is to write a paper on a subject connected with Political Economy. I do not undertake it with spirit, and am in a great hurry to get it done.—

We have had several visitors since you left us. Mr. Whishaw has been my guest for two days, and was so uniformly obliging [,] and agreeable, that I am sure, if you had been here, you could not avoid linking him. Mr. & Miss Grenfell, & Dr. Roget are our visitors at this moment, but they all leave us to-morrow, when we are going to Bath to see Mrs. Clutterbuck who has happily got over her time of difficulty, & is doing very well. Our new relations (I will not say grand child) is a girl. We shall not stay at Bath more than 2 or 3 days.

Since you left us we have paid, (for us) a long visit to our friends Smiths. Theirs is

a very pleasant home to go to—they have always intelligent people about them, as well as being intelligent themselves, and are so considerate & kind, that I always leave them with increased regard.

I hope you are laying in a good stock of health, & have as steady an animal to carry you in your rides as Consul.

Pray give my kind regards to Mr. Shepherd & believe me

My dear Lady Mary

Ever faithfully yours

David Ricardo

Gatcomb Park

6 Oct.

Dr. Roget says that is no regular declination of the Ecliptic one way, that it proceeds in a certain direction for some time & then return—not so with the precession of the equinox—that never reverts to its original place till it has gone all round the circle.

---

[前出テキストの邦訳]

親愛なるレディー・メアリー・シェパード様

貴女がご親切にもフランス人の著書からの抜粋をお送りくださったことに、心からの感謝を申し上げます。当方は、春分点歳差と黄道 (ecliptic) の傾との関係をあきらかにするという貴女の難問を解決しうるほどの天文学者ではありません。わたしはもともとひとの言を容易に信じない質ですので、この (フランスの——飯田) 哲学者がかれの計算に十分な根拠を持っているということはどうしても信じられません。したがって、地球の年齢に関して結局のところわれわれの知識を少しでも豊かにしてくれたかという疑問なのです。

このところわたしは、わたしの時間と注意をおおいに向けなければならない仕事に取り組んでおります。それは経済学に関連する問題にかんして論文をひとつ執筆することです。ですが余り熱心にはやっていません。できるだけ早くそれを終えてしまいたいのです。

貴女がお帰りになってから、いくにんかの人々が訪ねてこられました。ウィッショーさんは二日間滞在されました。かれはつねに思いやりがあり、気持のいい人ですから、貴女がここにいらっしやたらきつとかれとお近づきになられたと思います。いまは、グレンフェル氏とグレンフェル嬢、それにロジェ博士が滞在されていますが、あすお帰りになります。同時にわたしどももクラッターバック夫人に会いにバースにでかける予定でおります。クラッターバック夫人は幸いにも困難などを乗り越えることができ、産後の肥立ちもよいとのこと。私ども一族の新しい一員は (孫と

はいいたくないのですが)女の子でした。パースには二三日しか滞在できないでしょう。

貴女がお帰りになってから、私どもは友人のスミス家に長いこと滞在しておりました。スミス家はとても楽しい一家でして、いつも周りに知的な人々がおりますし、かれら自身も同様に知的で、非常につつましく気の利く人々なので、いつも尊敬の念を増してかれらのもとを辞去するほどなのです。

貴女がいつも健康でおられることを祈念いたしますとともに、コンスルのようなしっかりした馬で乗馬を楽しまれることを願っております。

シェパド氏に宜しくお伝えください。尊敬する

レディー・メアリー様

敬具

デーヴィッド・リカードウ

ギャトコム・パーク

10月6日

ロジェ博士の言われるところでは、黄道の傾きには定まったものはないそうですし、ある一定期間ある方向で進みそれから戻ってくるそうです。——春分点歳差についてはそうではないそうです。——軌道を完全に回り終わるまでは、もとに戻ることは決してないということです。

## 2. 本書簡のテキストについて

以上に示したように、本書簡が書かれたのは何年の10月6日であるかが不明である。しかし、それを推定するための材料は本書簡中に存在している。① この書簡がギャトコム・パークからレディー・メアリー・シェパドに届けられているということ。② リカードウの長女の、ヘンリエッタ・クラッターバックがパースにおいて出産したこと。③ 経済学にかんする論文(paper) (あるいは著書)を書きつつあること。④ ウィショウ、グレンフェル父娘、ロジェ博士がギャトコム・パークを訪問していること。⑤ それより以前に本書簡の名宛人であるレディー・メアリーがギャトコム・パークを訪れ、そのときの両者の会話中の話題に基づいて、レディー・メアリー・シェパドがリカードウに分点の計算にかんする「フランス人の著書」からの抜粋を送っていること。これらの事実はいずれも本書簡の執筆年の推定に重要なかかわりを持つ。とくに最後の点は、リカードウの生涯においてこれまで十分解明されてこなかったかれの知的興味・関心とそれへの具体的なかかわりを示す点で、重要な情報をわれわれに提供するものであろう。

①について。

リカードウがギャトコム・パークに移り住んだのは、1814年7月23日である。これは1814年7月

24日付けでリカードウがマルサスに宛てた書簡からあきらかである。リカードウはこの書簡の差し出し地を、その後のおおかたの書簡がそうであるような簡略な書き方ではなく、

“Gatcomb Park, near Minchin Hampton

Gloucestershire 25<sup>th</sup>. July 1814”

と詳細に書いている。この書簡でリカードウは、マルサスに「この手紙をギャトコムから書いていますが、当地へは昨日午後シラをつれてやってきました。」と述べて、新しい住居から書いていることを強調しているとも考えられるし、同じくこの書簡の結びの部分で「当地の天気はまことに心地よく、私も家族全体（シラをのぞき）から離れることができ、家具屋や大工などにとり巻かれて無上楽しい思いをしています。家内は2週間も立たなければやってこないでしょう、——彼女は家がすっかり整わないうちはこちらへ子供たちをつれてきたがりません。」と述べていることもそのことを裏付けていると言ってよいであろう<sup>(1)</sup>。

これによって、リカードウがギャトコム・パークに移り住んだ時期は確定できるので、本書簡が、それ以降に書かれたことは動かしがたい。

②について。

リカードウには8人の子供がおり、孫も多数いたと思われる。1817年12月16日付けのマルサス宛て書簡では、孫子に囲まれたリカードウ一族の様子が以下のように描き出されている。

「私は昔の家長たちのように、息子たち、娘たち、それから孫たちといった子孫どもにとりまかれています、——この連中は私どもを訪ねてあらゆる方面から集まってきますが、かれらが今にわが家の限界を突破するほど大勢になる恐れさえなければ、これが年中行事になることを私は主張するのですが。——」(VII, 223)

ところが、1816年11月17日付けおよび12月2日付けのジェームズ・ミル宛て書簡は、非常に興味深い内容を伝えている。

まず、ヘンリエッタ・クラッターバック (Henrietta Clutterbuck) の住居のあったウィコム・ハウス (Widcomb House) から出された11月17日付け書簡では、

「家内と私はここへ一週間きていますが、私どもがどれほど長く抑留されるかわかりません。家内の用向きはなによりもまず、この煩わしい世界へ生まれてくる私どもの初孫を歓迎するため、私どもはこの小さな新来者にたいする期待で毎時間を過ごしています。この焦燥な時間がすぎるまで私はギャトコムにとどまりたいと願わないこともなかったのですが、家内は私がいっしょにいることを最大の頼りと考え繰り返しそう申すものですから、ついに私も彼女のいうことを本当たと思ふようになりました。そこで私は居心地のよい化粧室を静かに占有してアダム・スミスとセトを

---

注(1) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa vol vi, p.113-115 (邦訳132-133ページ)。なお、以下では *Works*, vol. VI, 113-115のように、本文中では (VI, 113-115) のように略記する。

卓上におき、ギャトコムにいる場合よりもはるかに邪魔されないで時間を過ごしているというわけです。」(VII, 89)

とあり、リカードウが夫人とともに初孫の出生を心待ちにしている様子が伺える。今ひとつのミル宛書簡 (Ricardo to Mill, Wicomb, Bath; 1816.12.2) では、

「私どもの家族一同のあいだで関心をもってあんなに長く待ち受けていた出来事がついに生じた——クラッターバック夫人が私をおじいさんにしてくれました。彼女はさる水曜日、私がロンドンへいって留守のあいだ、女兒を生みました。」(VII, 101)

この書簡には、待ちに待った初孫の誕生を喜ぶ好好爺のリカードウの人となりを実によく出ていられると思われるが、如何であろうか。いうまでもなく、リカードウの娘のヘンリエッタ・クラッターバック夫人が無事女兒を出産したことを喜んでいるのである。「クラッターバック夫人はわたしをおじいさんにしてくれました。」などという表現はすでに何人かの孫を持つ人がいうことではない。この初孫こそ、トマス・クラッターバックとヘンリエッタとが設けた7人の子供の第1子エリザベス・メアリーで、彼女は1834年2月20日に17歳で死去した。このことからすると、彼女が生まれたのは、1816年<sup>(2)</sup>ということになる。

おそらく、ヘンリエッタの長女エリザベス・メアリーは1816年11月27日に生まれたことになる。したがって、本書簡は1816年11月27日以前に書かれたものではありえない。では、ヘンリエッタが生んだ子供は、彼女の7人の子供のうちの誰であったのか。

トマス・クラッターバックとヘンリエッタとのあいだには男子2人女子5人の子供がいた。第1子はエリザベス・メアリーで、1816年に生まれた。長男のエドモンド・ルイスは、リカードウの死後1824年に生まれて<sup>(3)</sup>いる。したがってこの二人のあいだに本書簡で言及されている“a girl”女兒が生まれていることになる。1818年10月15日付けのミル宛て書簡の冒頭で、リカードウは「お手紙をうけとってから家内とともにクラッターバック夫人をバースに見舞ってきました、産み月になるはるか前に突然死産をしたのです。」(VII, 308)と書き伝えている。さらに、1821年1月1日付けミル宛て書簡で、「またヘンリエッタは15日前に女の子の孫を贈ってくれました」(VIII, 329)と伝えている。この孫はヘンリエッタの3人目の子供ファニであろう。これからしておそらく次女のエレンが、この書簡の a girl ではないかと思われる。

### ③について

かくてつぎの問題はリカードウが用意しようとしていた経済学上の‘paper’が一体何かという点

---

注(2) *An Account of the Principal Branches of the Family of Clutterbuck from the Sixteenth Century to the Present Time. Chiefly Based upon the Herald's Visitations, and the Manuscript Collections of the Rev. R. H. Clutterbuck, F. S. A., and W. P. W. Phillimore, M. A., B. C. L.,* edited by Mark Edwin Northam Witchell and Christophe Roy Hudleston. Prepare themself to the search of their fathers. Privately printed and issued to the subscribers by John Bellows, Eastgate, Gloucester 1924. (53)

(3) *ibia*, p. 53.

にかかってくる。

これにかんしては、スラッファ版の全集第10巻にあるリカードウの著作の一覧に即してみると、<sup>1</sup> 言うまでもなく1817年にはリカードウ『経済学原理』第1版が刊行されている。それ以後1819年に『原理』第2版および未公開の「公債制度論」と「減債基金論」が執筆されている。本書簡中では、“a paper”と書かれており、『原理』のような著作を意味するものではなく、論文を指していると考えてよいであろう。これについてリカードウは、1819年11月9日のマルサス宛て書簡で「ひき受けていた減債基金にかんする論文を、私のいつもの伝で急行で仕上げました、がこの論文にはたいそう嫌気がさしてきたので、手が離れたことをよろこびました。」(IX, 131)としたためている。これは本書簡でリカードウ自身がいま取り掛かっている論文に気乗りがしないと言っていることと符合する。このようなことも考慮して、本書簡は『原理』刊行後に書かれたものであることは動かしがたい。元来リカードウはかれの著書や論文の執筆をミル (James Mill) 等の強い奨めにしたがって書き始めることが多く、そのことはリカードウの弟のモーゼスが兄リカードウについて書いた小伝 (David Ricardo, in: *Annual Biography* 1823, 『全集』第10巻所収) にも触れられている。<sup>(4)</sup>

#### ④について

本書簡中に登場する人物のうち、ウィンショーとグレンフェルについてはリカードウの書簡にしばしば言及されたり、書簡を交してもいて、この両者との関係は特別ここで取り上げる必要はないかも知れない。しかし、本書簡の一般的な性格から見ると、この両者はとくに下院議員としてのリカードウにとっては重要な意味をもっているといつてよいであろう。というのも言うまでもなくリカードウはこの年、下院議員に当選しているからである。

リカードウがウィンショーを知ったのはかれが地金論争に参加した1810年代前半であるが、ウィンショーに会ったのはおそらくマルサスの紹介で King of Clubs の会員になった1817年6月であろう。<sup>(5)</sup> ウィンショーはマルサスの Cambridge 以来の友人であったからかれがウィンショーをリカードウに紹介したのであろう。両者の交友関係はスミス (Thomas Smith) をも交えて後にリカードウの下院への立候補に繋がってゆくことになる。

1819年10月14日付けマルサスからリカードウ宛ての書簡で、マルサスは「ウィンショーはギャトコムで過ごした2日間のことを大いに満足して話しています。」(VIII, 107) と伝えている。ここでマルサスがウィンショーについて触れているのは、同じ年の9月21日付けのマルサス宛てのリカードウの書簡を念頭においてのことであろうと思われる。そこではリカードウはつぎのように述べている。

「私は最近イーストン・グレイのスミス宅でウィンショー氏の仲間に入れてもらって愉快的な数日を送りました。——かれはたいへん上機嫌で、また大変気持ちよくしてくれました。われわれはいく

注(4) *Annual Biography* のつぎの記述にも注意する必要がある。

Mr. Ricardo never courted notoriety: at first he shrank from it, not so much because he undervalued it, as from a distrust, which not even success removed, of his powers. 374.

(5) *Works*, Vol. VI, 88 なお、1812年8月29日付けマルサス宛て書簡をも参照。

つかの政治的な議論，とくに議会改革にかんする議論をしましたが，かれの譲歩は平素私がみとめていたところよりもっと寛大なものでした。」(VIII, 75)

また，さきのマルサスの書簡を受けてリカードウは，同年11月9日付けトマス・スミス宛て書簡でさらにつぎのように書いている。

「ウィンショー氏がごく短期間の当地の訪問に満足したと言っておられるそうで，私も喜んでいません。私もかれの来訪は非常に愉快でした——これ以上気持ちのよいひとはいず，またこれ以上に自分のまわりのあらゆる事物を満足してうけとろうとするひとはいないでしょう。われわれは議会の改革問題について多くの会話をかわしましたが，私はこれまで想像していた以上にわれわれの意見が一致するのを知ってうれしく思いました——私はウィンショー氏がわれわれにむかってよろこんで容認しようとしているような改革にまったく満足すべきです。」(VIII, 129)

ここでは，議会改革問題には触れないが，ウィンショーがリカードウを訪問したのはこれらからして1819年10月になってからであることは確実であるように思われるし，本書簡でのリカードウのウィンショー評もまえの引用中の評言と一致しているといつてよいであろう。

マレット (J.L. Mallet) によれば「リカードウの格別の友人」(VIII, 152n) であるグレンフェルについて，1819年9月23日付けミル宛て書簡でリカードウは「今週の終わりころか来週のはじめにグレンフェルを迎えることになっています」(VIII, 77) と伝えている。グレンフェルは10月早々にリカードウを訪問したはずである。

いま一人の人物であるロジェ博士は，有名なロジェの『シソーラス』(*Thesaurus of English Words and Phrases*, 1852) の編者であり，医学物理学に造詣の深い人物であり，本書簡でレディー・メアリー・シェパドと議論したと思われる問題にも一枚噛んでいることは，追伸からあきらかである。

1817年10月10日付けのマルサス宛て書簡で，リカードウはつぎのように述べている。

「ロジェ博士は数日間スミス氏のもとを訪れていました。——かれは一夕ギャトコム私どものところにも滞在しました。——われわれは一同，博士の謙虚な態度に非常に感服しています，そして博士がわれわれの尊敬と敬愛に値する人物であることを十分に認めています。」(VII, 191)

それに対してマルサスは1817年10月12日付けリカードウ宛て書簡で「ロジェ博士には，一，二度合ったことがあります，気持ちのよい温雅な人だといつも思っていました。かれは故ホーナに非常に気に入られ，尊敬されていました。」と述べて，先のリカードウからのロジェ博士評に同調しているが，リカードウをロジェ博士に紹介したのはホーナであったかもしれない。リカードウのホーナへの強い尊敬の念からして，十分ありうることであろう。また，本書簡でリカードウはロジェの解説に信頼を置いているように読み取れる。

[補注：本書簡の用箋について]

本書簡には，郵便局の受取を示す post mark はない。したがって直接，おそらくは使用人の手を介して，レディー・メアリーに届けられたものと考えられる。リカードウの書簡には，かれが受け取ったミルやマルサスのそれと比べ，発信地，発信日時とも几帳面に細かく記載されている。したがって，一

---

注(6) ロジェについては Sraffa 版の全集第 VII 巻192ページに簡単な紹介がある。

一般的に見て本書簡のように年の記載のないものは、きわめてまれである。このような場合に、リカードウ全集編集者のスラッファは、いわゆる消印 post mark の年月日を頼りに、発信日時を推定しているが、これにも問題がある。というのも、本書簡のように郵便局をへないで直接相手に届けられたと思われる書簡、すなわち消印のない書簡が意外に多いということである。

いま一つの問題は、本書簡が書かれている用箋にある。本書簡は4折り版の厚手の用箋を二つ折にし、4頁建てにして書かれている。用箋には、[1813] という透かし watermark が入っている。本書簡購入時の売り立てカタログが、本書簡を1813年10月6日付けとしたのは、この透かしによったものと思われる。しかしこれは年月推定のなんの根拠にもなりえない。

現在、Cambridge 大学 University Library 所蔵のRicardo Papers には、スラッファ版の全集に収められた書簡のうち、リカードウからミルおよびマルサスに宛てられたものがそれぞれの文庫から移管されてすべて収められている。それら書簡の用箋の大半に、透かし模様があるが、それも一様ではなく所蔵されている書簡の範囲内では、33種の多きにわたっている。筆者が Ricardo Papers を調査した範囲内でいえば、なんらかの透かしをもった用箋による書簡は以下ようになる。\*は王室紋章を表わす。

発信日	Watermark	発信日	Watermark
1811. 1. 1	CROWN	1817. 11. 9	1811 C WILMOTT
1811. 1. 1	1806 J WHATMAN	1817. 12. 16	1814 C WILMOTT
1811. 6. 18	1806	1817. 12. 18	1815 RUSE & TURNER
1814. 6. 14	1812	1817. 12. 30	1814 C WILMOTT
1814. 8. 11	1802	1818. 1. 6	1814 C WILMOTT
1814. 8. 30	1811	1818. 5. 25	1817 J GREEN
1815. 6. 27	1813 *	1818. 8. 12	1816 NEWTON
1815. 7. 30	1813 C WILMOTT	1818. 9. 8	1815 T EDMONDS
1815. 8. 30	1813 *	1818. 9. 29	1815 RUSE & TURNER
1815. 10. 17	1813	1818. 10. 15	1815 RUSE & TURNER
1815. 10. 24	1813 C WILMOTT	1818. 11. 8	1815 RUSE & TURNER
1816. 4. 24	1813 *	1818. 11. 23	1815 RUSE & TURNER
1816. 5. 28	1814 C WILMOTT	1818. 12. 12	1815 RUSE & TURNER
1816. 8. 8	1813 C WILMOTT	1818. 12. 22	1817 J GREEN
1816. 8. 9	1815 C WILMOTT	1818. 12. 28	1815 RUSE & TURNER
1816. 9. 8	1813 C WILMOTT	1819. 8. 10	CROWN
1816. 10. 5	1813 IVY MILL	1819. 9. 6	CROWN
1816. 10. 14	1815 SMITH & ALLNUTT	1819. 9. 9	1814 GOLDING &
1816. 10. 14	1815 SMITH & ALLNUTT	1819. 9. 21	1814 GOLDING &
1816. 11. 20	1813 IVY MILL	1819. 9. 23	CROWN
1816. 11. 20	1813 IVY MILL	1820. 7. 27	CROWN
1816. 12. 2	1814 KINGSFORD	1820. 9. 18	CROWN
1817. 1. 24	1813 *	1820. 9. 25	CROWN
1817. 2. 8	1813 crown and flut	1820. 10. 10	1818 J GREEN
1817. 2. 21	1813 T EDMONDS	1820. 10. 14	1819 J GREEN
1817. 3. 9	1813 C WILMOTT	1820. 11. 16	CROWN
1817. 3. 22	1815 C WILMOTT	1820. 11. 24	1819 J GREEN
1817. 3. 26	1815 C WILMOTT	1821. 1. 1	1816 MIDDLETON &
1817. 6. 3	1814 KINGSFORD	1821. 7. 21	1820 J GREEN
1817. 8. 7	1815 RUSE & TURNER	1821. 8. 28	1820 C WILMOTT
1817. 10. 21	1815 RUSE & TURNER	1821. 9. 9	CROWN

1821. 9. 18	CROWN	1823. 4. 29	1820 C WILMOTT
1821. 9. 28	1813 J GREEN	1823. 5. 28	1821 J WHATMAN
1821. 10. 11	1817 RUSE & TURNER	1823. 7. 13	CROWN
1821. 10. 14	1817 RUSE & TURNER	1823. 8. 3	1822 RUSE & TURNER
1821. 12. 18	CROWN	1823. 8. 7	1822 RUSE & TURNER
1822. 8. 4	1821 J WHATMAN TURNEY	1823. 8. 15	1822 RUSE & TUENER
1822. 9. 17	1821 J WHATMAN	1823. 8. 30	1822 J WHATMAN
1822. 11. 3	CROWN	1823. 8. 31	CROWN
1822. 11. 14	1819 J WILMOTT	1823. 9. 5	CROWN
1822. 12. 16	1822 SLADD		

これによってあきらかなように、リカードウが書簡をしたためるさいに規則的に用箋を選択したということはいえない。ましてや用箋の透かしの年号と差し出し日時が関連を持つということもない。

「1813年」という透かしをもった用箋の使用は、上記の表で見ると1815年から1817年に比較的集中している。先にも述べたように、用箋の使用に規則的な関係はないので、これをもって本書簡執筆年推定の証拠とすることはむずかしい。また、上記①からして「1813」という透かしが本書簡執筆年であることを表す根拠とするわけにはゆかない。

### 3. リカードウとレディー・メアリー・シェパド

この書簡の内容上の問題に深くかかわるレディー・メアリーについては、きわめて情報に乏しくスラッファ版の全集ではただ一度言及されているにとどまる。それも1819年9月6日付けミル宛て書簡の注のなかにおいてである。しかしこの書簡はわれわれの課題にとって重要であり、本書簡の内容とつながり、重なり合うものを見出すことができる。そこではつぎのように書かれている。

「先便をさしあげたのち、私はバースへ行ってクラッターバック夫妻のところまで数日滞在しました。バースから巡回裁判に立ち会うためグロスタへ行き、そして数日間を大陪審のために奉仕しました。グロスタから戻るさいシェパド氏を同道したというよりかれに先導されてギャトコムに着いたところそこにレディー・メアリーを発見したというわけで彼女といっしょではどんな種類の仕事をする時間もありえないことをご存知のとおりです。彼女が私どもに滞在中スミス夫妻がギャトコムで2、3日をすごし今私どもは返礼の訪問をしているところです。木曜日からこちらにまいっており、たぶん明日ギャトコムに帰りましょう。」(VIII, 56)

リカードウは、前節で触れたような事情もあり、出産間近のヘンリエッタ・クラッターバック夫人をバースに見舞ってからグロスタにゆきそこからヘンリー・シェパドを伴って、というよりはかれに先導されてギャトコムに帰るのであるが、そこにはすでにレディー・メアリー・シェパドが来ていたということなのであろう。そもそも本書簡の主要な内容をなす天文学上の問題は、このとき議論されたと言えそうである。レディー・メアリー・シェパドは恐らく議論好きの女性で、それは“you know that in her company there can be no times for works of any description”という表現のなかや、のちに見るマライア・エッジワースの書簡中に遺憾なく示されているといえようし、これはまた彼女との会話がこのときはじめて持たれたのではないことをも示している。さ

らには、ジェームズ・ミルもレディー・メアリーと旧知の関係であったということであろう。

おそらくレディー・メアリーにかんするリカードウのこのような観察はマライア・エッジワースの感想と通じるものであろう。<sup>(7)</sup>

では一体レディー・メアリー・シェパドとはいかなる女性で、リカードウは何がきっかけで彼女を知るようになったのか。

リカードウとの関連で、レディー・メアリーにかんしてまとまった叙述を提供するのは、Weatherall, D., *David Ricardo* 1976 <sup>(8)</sup> であろう。

ウェザオールは、リカードウの長女ヘンリエッタの1812年10月15日付けの父リカードウ宛て書簡を引いて、ラムズゲートで彼女がレディー・メアリーに会ったことをあげている。<sup>(9)</sup>

さらに、ウェザオールは *The Globe* の記事を引合に出しつつ、リカードウ夫妻がカーチス夫妻主催の夜会でレディー・メアリーと同席していることをあげているから、少なくとも、1812年の10月には、リカードウはレディー・メアリーの面識を得ていたことになる。そのうえさらに注目すべきことに、ウェザオールは、ハリエット・マーティノーの自叙伝に拠りつつ、「ハリエット・マーティノー、彼女は知的ではあったが社会的にはさほどの人とも思われぬ、その彼女が年に似合わないつぎのようなことを語っている。『ある晴れた日、あるカントリーハウスで彼女 (=レディー・メアリー・シェパド) は (私の記憶が確かならデヴィッド・リカードウにむかって) いかがですか、宇宙についてちょっとお話しませんかといいながら窓辺に席を取った。』と。」(Weatherall, D., *David Ricardo a Biography*, The Hague 1976, p.91) と述べている。かれら、すなわちリカードウとレディー・メアリーとの出会いが天文学とのかかわりを最初から持っていたことを伺い知ることのできる材料が、ここに示されているといつてよいであろう。<sup>(10)</sup>

マーティノーはこれがいつのことであったかを明記していない。しかし、リカードウとレディー・メアリーが天文学上のテーマ (ここでは宇宙) について議論したことがあったと考えてよいであろう。なお、マーティノーはレディー・メアリーの天文学にかんする興味を「もっとも晦渋で形而上学的」と言っている。(Martineau, op. cit. p. 371) マーティノーの自叙伝は、クロノロジカルに書かれてはいるが、叙述の時間的順序はときとして前後している。自叙伝記述において避けがたい点かもしれないが、マーティノーはこれを彼女の30から32歳の時期の記述 (Martineau, *Autobiography*, I, Section II) のなかで述べている。ここでのレディー・メアリーにかんするマーティノーの記述は批判的であり、当該箇所にはリカードウについての言及はない。因にリカードウについて彼女が言及

---

注 (7) *Works*, VIII, 57. スラッファはレディ・メアリーを下院議員ヘンリ・ジョン・シェパドの妻で、ロウズベリ伯爵の娘としている。(ibid)

(8) Weatherall, D., *David Ricardo a Biography*, The Hague 1976, p.91.

(9) この書簡で、ヘンリエッタはつぎのように書いている。

I understand, and if so, will open the ball with Lady Mary Sheppard. Lady Madelina is very unwell, therefore she will be spectator only. .... (*Ricardo Papers* of University Library, Cambridge, ADD7510, VIII, C.1)

(10) Harriet Martineau, *Autobiography*, vol. 1, 1877, p. 371.

しているところは一箇所にしか過ぎない。このことは彼女のマルサスにたいする言及と対照的であり、興味深い。ウェザオールの記事はこれにかんしてむしろ読者に誤解を与える恐なしとしない。夜会でレディー・メアリーとリカードウが会った1812年当時マーティノーは10歳になるかならぬかの少女だったのである。

しかし、レディー・メアリー個人にかんする情報は、ウェザオールが「この時期の bluestockings のなかで最もよく知られていた」(ibid. p.91) としているにもかかわらず、きわめて貧困なのであ<sup>(11)</sup>る。少なくとも、スラッファが前掲のミル書簡につけた注以上にはでていないといわなければならない。レディー・メアリーには、ウェザオールもあげているように——スラッファの注によれば「2, 3の哲学的論文の著者」で——, *Essay on the Relations of Cause and Effect* という著書がある。この著書は1824年に刊行されたが、Cambridge の University Library の所蔵本で見ると、匿名である。

マーティノーによれば、レディー・メアリーはティアニーによって名声を与えられたことになるが、今回の調査ではこのティアニーがはたして誰であるのかを確認できな<sup>(13)</sup>かった。しかし、レディー・メアリーにかんしては Blakey の *History of Philosophy of Mind* (全4巻, 1848年) がかなりまとまった記述を残している。プレイキーは著書の第4巻をイギリスの形而上学の歴史にあてて<sup>(14)</sup>おり、それ自体きわめて興味深い内容をもっていると思われるが、なによりもここではレディー・

---

注 (11) “bluestocking”にかんしては18世紀後半から19世紀前半にかけての「インテリ」婦人たちの集団という広い意味に取っておいたほうがよさそうである。なおこの名称の由来については、たとえば水田珠枝氏は「ブルーストッキングという名称は、自然科学者ベンジャミン・スティリングフリートが、伝統をやぶって青い靴下をはいて会合に出席したことからはじまったといわれている。」とされているが(水田珠枝『女性解放思想史』1979年, 202ページ), ことになった説明もあることを付言しておく。

(12) [Lady Mary Shepherd] *An Essay upon the Relation of Cause and Effect, controverting the doctrine of Mr. Hume, concerning the Nature of that Relation; with Observations upon the Opinions of Dr. Brown and Mr. Lawrence, connected with the Same Subject*. London 1824 なお, Weatherall, D. の本書にかんする表記は上記のように非常に不正確である。(Weatherall, D., *David Ricardo a Biography*, The Hague 1976 p.91) なお, 本書は匿名で刊行され, しかも初版の表題はつぎのとおりである。

“An Enquiry respecting the relation of cause and effect.....” (1819)

そのほかに, “*Essays on the perception of an External Universe, and other subjects connected with the doctrine of Causation*. London 1827” がある。

レディ・メアリー・シェパドについてマーティノーはつぎのようにいう。

「これらの人々はレディー・メアリー・シェパドのような学者ぶったブルーストッキングといわれる人々となんと違っていただろう。彼女はティアニー氏によって名声を与えられて有名になったが, それによると因果論や同種の問題にかんして彼女に匹敵しうる人はイギリスにはいない, というのである。晦渋で形而上学的な天文学にかんしては, 彼女がそう思われていたことは確かであった。」(Martineau, *Autobiography* I 370-1) ここでマーティノーは1827年の“Essays”を念頭においてるのであろう。

(13) 前注を参照。

(14) Blakey, Robert, *History of the philosophy of mind, embracing the opinions of all writers of mental science from the earliest period to the present time*. 4 vols. 8vo London 1848, vol.4 chap. I “Metaphysical Writings of Great Britain, from the year 1800 to the present day”.

メアリーは明確にイギリス形而上学の流れのなかに積極的に位置づけられていることに注意しておきたい。マーティノーがレディー・メアリーの天文学を評して「最も晦渋で形而上学的な」としていることとまさに符合する。

さきに挙げた1819年9月6日付けミル宛て書簡で、リカードウはレディー・メアリー・シェパドとギャトコムで会ったことを明言している。そしてそれは両者がはじめてあった機会ではなく、すでに互いに相知る関係にあったことをも示していた。1812年10月には二人はカーチス夫人の夜会に同席しており、その後、マーティノーが語っているように宇宙について議論する機会もあったのであろう。一見まったく別の世界にいるように思われるリカードウとレディー・メアリーとが、知的世界において重なり合うものを持つに至ったきっかけと両者の交友の軌跡はいかなるものであったのだろうか。この点を解明するために、ひとつはレディー・メアリーの夫で下院議員のヘンリー・シェパドとリカードウとの関係を見なければならぬが、スラッファ版の全集は今ひとつ重要な情報を提供している。それはレディー・メアリーにたいするマライア・エッジワース (Maria Edgeworth) の批評——1822年3月9日付けラクストン (Ruxton) 夫人宛て書簡に書かれている——をスラッファがさきの書簡のなかで与えているからである。その書簡を少々長くなるが引用しておこう。

「私たちはいくつかの定評のある朝食会の場をもっていて、その機会に思ったときに行けて、一二の紳士たちと楽しいときを過ごせるご招待を受けることもあります。——それがどのくらいかは一昨日の第2の手紙に書いておきました。こうした家庭的な朝食会はグローブ・ハウス (レディー・ホワイトブレッドのお宅の) であったり、ルフェーブル夫妻 (レディー・ホワイトブレッドのお嬢さんとお嬢さん) のところであったり、マーセット博士夫妻のところや、リカードウ夫妻のところであったりします。これらの朝食会はほかのどんな時よりもとても和やかです。心ある人や他人に関心のあるひとは誰でもリカードウさんを知ろうとしますし、かれは私の好む人をかれとの朝食にともなうことを許してくれましたので、いくにんかのとくに若いアメリカの友人のラルストンさんや若いジョン・ルフェーブルさん (レディー・E・ホワイトブレッドのお嬢さんと結婚した紳士の弟さん) のために尽力することができました。かれは浅黒く皺だらけで百歳にもみえるようなのですが本も読みますし、踊りも踊りますし、FやHからとても評価されています。しかし結局フランス・ビューフォーツとともにリカードウさんのもとに伺ったのがいちばん楽しいことでした。かれらは互いに会話をおおいに楽しみました。このところブルー・レイディーの方々と経済学について話すことがおおいにはやっています。レディー・メアリー・シェパドとかいう方がおられまして、このことでやかましく議論をされますが、マーセット夫人のようなもっとセンスのある方は黙って聞いていらっしやいます。先日、ある紳士がこのクラブの二人のメンバーがなんらかの点で意見が一致す

注 (15) ヘンリー・シェパドとリカードウとの関係を示唆する材料は極めて乏しく、さきの1819年9月6日付けミル宛て書簡のみである。リカードウは「シェパド氏はご存じのようにトリー党員で、内心からも利害関係からも閣僚たちに首っただけです。」(VIII, 56) と、辛辣に批評している。

(16) *ibid.*, 56.

(17) *Works*, VIII, 57.

るのを見ることができると、いつでも経済学クラブの会員になるのだがと、上手に答えておりました。このところ上流の夫人たちが要求することと云ったら、かれらの娘たちの家庭教師は経済学を教えなければならないということだそうです。」

ここでは間接的ながらレディー・メアリー・シェパドとリカードウとの関係にpolitical economyの問題が関与していることが示唆されている。ここでわれわれは改めてレディー・メアリーと political economy との関係、それへのリカードウのかかわりという問題に到達するが、それは小稿の範囲を逸脱するので稿を改めて論じたい。

いまひとつレディー・メアリー・シェパドとリカードウとの関係にかんする本書簡の内容上の問題として、春分点歳差と黄道の傾きにかんする天文学上の計算問題を見ておかなければならない。かれらが議論の対象としたと思われるフランス人の著者とは誰か。レディー・メアリーがリカードウに与えたとされる抜き書きは残念ながら Ricardo Papers にはない。これがどの書物からの抜粋であるかを、本書簡の内容だけから類推するのは極めて困難であるが、19世紀前半がイギリスにおいて天文学をはじめ、自然科学各分野のアマチュア化が進んだ時代であり、その一環としてラプラスの『宇宙システム考』の英訳 (*The System of the World*) も 1809 年に刊行されている。しかも本書第 2 巻第 13 章 “Of the Precession of the Equinoxes, and of the Nutation of the Axis of the Earth” には春分点歳差の計算結果が記されている。本書簡テキストにある “the age of the world” という用語法も共通である。これらからして抜粋がラプラスの著作からのものである可能性は決して小さくない。周知のとおり、リカードウは自然科学的な知の諸領域になみなみならぬ関心を持っていた。地質学会の会員におされたり、鉱物学のための実験装置を自宅に作らせたりもしている。しかし天文学にいかほどの興味と関心をよせていたかは、本書簡をのぞいては証拠とすべきものは見当たらない。

#### 4. 小 括

小論は、レディー・メアリー・シェパド宛のリカードウの書簡がいったい何年に発信されたかを調査し、確定することであった。これについては当面われわれはこの書簡が 1819 年にレディー・メアリーに届けられたと考える。これまでわれわれが挙げてきた証拠はどれひとつとしてそのみでわれわれの目的を達成せしめるものではない。逆にどの証拠も状況証拠としては、われわれの結論にとって十分なものであると考えてよいように思われる。とくにこれまで検討してきたいくつかの材料のうち、リカードウの孫娘エレンの誕生はこの書簡の内容からみてわれわれの目的にとって重要な事実であると考えられる。このことは、リカードウの書簡に含まれるかれの個人的なサークルとこの書簡のかかわりをいっそう強く示すものとなっているといえよう。

この書簡一通の存在をもってリカードウ経済学の質を云々することはできないが、われわれは少

---

注 (18) Colvin, Ch. (ed.) Maria Edgeworth. *Letters from England 1813-1844*, Oxford 1971 p.363-4.

なくともリカードの経済学と、リカードにおける経済学とを明確に区別して論じることの必要なことをこの書簡から読み取ることができるのではないかと考える。この書簡が向けられたレディー・メアリーとリカードのかかわりは、上に述べてきたいくつかの点からして 'political economy' に強い関心を持つ女性たちとリカードの関係と、それによってあきらかになる political economy にかんする多様な了解の存在という問題を表面に浮かび上がらせるであろう。このようなことについては稿を改めて論じてみたい。

#### 参 考 文 献

- 1) Abbott, C. C., *A catalogue of papers relating to Boswell, Johnson & Sir W. Forbes found at Fettercairn House, 1930-1*, Oxford 1936.
- 2) Blakey, R., *History of the philosophy of mind, embracing the opinions of all writers of mental science from the earliest period to the present time*. 4 vols London 1848.
- 3) Checkland, S. G., The propagation of Ricardian economics in England, *Economica* Feb. 1949.
- 4) Checklans, S. G., *David Ricardo Economic History Review* Vol. 114 (3) Wood, J (1985).
- 5) Colvin, Christina (ed.) Maria Edgeworth. *Letters from England 1813-1844*, Oxford 1971.
- 6) Daig, Peter, *A concise history of astronomy*, London 1950.
- 7) Forbes, Sir William Forbes, *An account of the life and writings of James Beattie, LL. D.* 2 vols Edinburgh.
- 8) do. *Memoires of a banking house*, London 1860.
- 9) Houzeau, J. C. and A. Lancaster, *General bibliography of astronomy to the year 1880*, new edition with introduction and author index by D. W. Dewhirst London 1964.
- 10) Laplace, P. S., *Exposition du systeme du monde*. 2e ed. Paris 1798-9.
- 11) do, *The system of the world. trns. from French*, by H. H. Harte 2 vols Dublin 1830.
- 12) Marcet, J., *Conversations on political economy*, London 1816.
- 13) Martineau, Harriet, *Autobiography, with memorials by Maria Weston Chapman*, 3 vols London 1877
- 14) do, *Biographical sketches* London 1869.
- 15) Miller, F. F., *Harriet Martineau*, NY 1972.
- 16) Penneckock, A., *A history of astronomy*, London 1961.
- 17) Pevsner, Sir Nicolaus Bernhard Leon, *The building of England 1951-74*.
- 18) *The works and correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa vol. VI-X and Index.
- 19) Shepherd, Lady Mary, *An essay upon the relation of cause and effect, controverting the doctrines of Mr. Hume, concerning the nature of that relation ; with observations upon the opinions of Dr. Brown and Mr. Lawrence, connected with the same subject*.
- 20) Weatherall, D., *David Ricardo a biography*, 1975.
- 21) Webb, Robert Kiefer, *Harriet Martineau a radical Victorian*, London 1960.
- 22) Witchell, M. E. N. and C. R. Hudelston (ed.), *An account of the principal branches of the family of Clutterbuck, Gloucestershire*, privately printed 1924.
- 23) *Annual biography* 1824.
- 24) *Quarterly Review, Edinburgh Review, Gentleman's Magazine, Scotsman, British Review and London Critical Journal, Monthly Magazine or British Register of Literature, Blackwood, British Critic, Westminster Review, Monthly Repository, Fraser's Magazine, The Globe*.
- 25) *Concise encyclopaedia of astronomy*, 1967.

- 26) *Biography and genealogy master index* ed. by MC Herbert.
- 27) Allibone, S. A, *A critical dictionary of English literature and British and American authors living and deceased from the earliest to the latter half of the nineteenth century, containing over 46,000 articles (authors) with 40 indexes of subjects*, 3 vols Philadelphia 1858-1871, reprint 1965.
- 28) *A biographical dictionary of the living authors of Great Britain and Ireland*.
- 29) *Dictionary of anonymous and pseudonymous English literature* (Samuel Halkett and John Laing) reprint. 1971.
- 30) *Encyclopaedia britannica* 11th ed. 1911.

(経済学部教授)